

1 June 2024

日本ヴィクトリア朝文化研究学会  
The Victorian Studies Society of Japan  
Newsletter No. 23

Historia magistra vitae のトポス

舟川 一彦

「歴史は人生の教師なり」(Historia [est] magistra vitae) ——おそらく数え切れない人々に引用されてきたであろうこのフレーズは、今や多くの人にとって陳腐な決まり文句となってしまったかも知れない。が、このありふれた格言がヴィクトリア朝の英国で見せた展開には、いささか興味をそそり、一考に価すると思われる点がある。

過去の事象およびその記憶が現在を生きる人間に人生万端に関して抛るべき教訓を与えてくれる、したがって歴史は現在の問題解決に役立つ智慧を与えてくれる実用的な知識であるというメッセージを伝えるかに見えるこのフレーズだが、標準的典拠とされるキケロの文 (*De oratore* 2.9.36) は、必ずしも歴史の教訓性と歴史学に対する称賛を主旨としているわけではない。素直に読めば、これは歴史学よりもむしろ弁論術およびその訓練のための主教科である文法や修辞学(つまり文学関連の学問)の価値を称える文なのだ。前段で国政の遂行に資する弁論術の役割を指摘した登場人物アントニウスは、「また、時代の証人、真実を照らし出す光、記憶の命の糧、人生の師、古を告げ知らせる使者である歴史は、弁論家の声以外の誰の声によって永遠の不滅性を与えられるであろう」

(『弁論家について』大西英文訳、岩波文庫、傍点引用者)と続けて、弁論家の属性である「言葉を創造し、言葉を選択する知識」の優越性を説く。もっとも、前段での国政への言及からも察せられる通り、ここでは文学と(歴史学が扱う最も主要な領域である)政治とが、区別されるべきものというよりは、同じ「人生」に関わる営みとして近接した関係にあるものとイメージされているようである。もうひとつ推察できることは、「歴史」と「人生の師」を当たり前のように同格関係に置くアントニウスの口ぶりからして、キケロやアントニウスの時代よりはるか以前から、歴史を何よりも有用な知識と信じる人々の間で「歴史は人生の教師なり」のフレーズは繰り返し口にされ、伝えられて、すでに定型的表現の地位を得ていたのであろうということだ。

キケロをはじめとする古代の弁論術が再び脚光を浴びるようになったルネサンス期、英国ではサー・フィリップ・シドニーが『詩の弁護』(1595)の中でキケロのこの箇所を引用している。「吾輩こそは時代の証人、真実を照らし出す光、記憶の命の糧、人生の師、古を告げ知らせる使者である

[と歴史家は主張します]。歴史家先生が<sup>のたま</sup>宣うには、哲学者が机上の美德を教えるのに対して、自分は実地の美德を教える。……あちらがなにがしかの抽象思考によって美德を教えるなら、こちらはただ先人の足跡に従うことのみを推奨するのだ、と」(Sir Philip Sidney, *An Apology for Poetry*, ed. Geoffrey Shepherd, 3rd ed., Manchester, 2002, p. 89)。ここで、キケロが歴史の異名として列挙したフレーズそのものは(ラテン語で) 改変なく引用されているが、文全体の趣旨にはかなりの異同がある。第一に、話者の違い。『弁論家について』では弁論家の立場を代弁する登場人物がこのフレーズを引用するのに対して、『詩の弁護』の当該箇所では語っているのは揶揄の対象である歴史家自身である。第二に、歴史学と対比される学問(文学)の範囲が狭められている。キケロにおいて弁論家の職掌である「言葉を創造し、言葉を選択する知識」は言論人・文人による「言葉の創造的営み」全般に関する知識(大西英文による注)を含んでいたが、シドニーにおける「詩」から神を讃える詩や哲学的内容を扱う詩は除外され、創作的であって美德の涵養に資する——教訓的ストーリーによって「教えかつ楽しませる」(teach and delight)——ような種類の詩に限定されている。第三に、この引用の前後にまたがるシドニーの文章は、キケロのものよりもより攻撃的な調子を帯びている。そもそも『詩の弁護』という文書全体が法廷弁論を模した形をとっており、しかもこの箇所では扱われているトピックは哲学、歴史、詩の三者のうちいずれが学問として最高位にあるかという問題なのだから、優劣を比較される当事者の口から出る言葉が激しいものになるのは当然だろう。とはいえ、歴史学そのものよりも文学系の学の美点を主張するという文脈の中で「歴史は人生の教師なり」の定型文句を用いるという点で、シドニーは基本的にキケロの路線を踏襲していると言える。

この路線から逸脱する顕著な用例を見出せるのが1820年代である。1829年から30年にかけての冬学期にボン大学で開講した講義をもとにした『古代史講義』(1851; 英訳版1852)の第一講義冒頭で、B. G. ニーブールは同時代における歴史学の進歩と歴史知識の急速な増大に触れ、こう言っている。「歴史学の領土が拡張すればするほど、歴史学は真の人生の教師(the true *magistra vitæ*)にしてどの分野にも増して教育力ある(instructive)学問分野となるのです」(B. G. Niebuhr, *Lectures on Ancient History*, trans. Leonhard Schmitz, London, 1852, 1:1)。ここで、「歴史は人生の教師なり」の喩えは、キケロやシドニーのような屈折した文脈の中ではなく、ストレートに歴史学の力と価値を讃えるために用いられている。歴史学は文学よりも先に近代的な方法論と厳密さを備えた学へと変貌を遂げ、最も「教育力ある学問分野」と自己評価できるほどに成長した。19世紀ドイツの大学におけるこの歴史学の進展(ニーブールはその先導者のひとりでもあった)によって、文学の引き立て役として歴史が利用されることを歴史家自身が潔しとしなくなった。ニーブールの宣言は、歴史学に携わる学者のこのような矜持と自意識の表明と受け取ることができるだろう。その自意識が「人生の教師」の前に置かれた「真の」(true)という形容詞ににじみ出ているように思えてならない。

ニーブールに先駆けて歴史学の近代化を企て、歴史を新たな「学」(*scienza*)のステータスに到達させたのが18世紀のイタリア人ジャンバッティスタ・ヴィーコであり、ニーブールの歴史観と方法論を最も熱心に受容しようとした英国人のひとりがトマス・アーノルドだった。アーノルドは『ローマ史』(*History of Rome*, 1838)第1巻の序文で、ニーブールの研究成果を英国の読者向けにわかりやすく伝えることが自著の目的だと説明している。アーノルドはまた、遅くとも1830年までにヴィーコの著作と出会い、歴史を〈有用な学〉にするための前提となる歴史理論を学んでいた。彼のこ

のヴィーコ研究の痕跡が最も濃厚にあらわれているのが、トゥキュディデス『ペロポネソス戦争史』の注釈書全3巻(1830-35)の第1巻に付した「補遺1」——のちに「国家の社会的発展に関する試論」と題して『雑纂』(*Miscellaneous Works*)に再録——におけるヴィーコの循環史観の紹介である。「個人と同様、国家も一定の順序で一定の変化を経験するもので、発展の各々の段階でその段階特有の問題に遭遇するのが常である」(Thomas Arnold, ed., *The History of the Peloponnesian War by Thucydides*, 3rd ed., Oxford, 1847-48, 1:503)。したがって、現在自分たちが生きている時代と同じ発展段階にあった過去の民族の歴史を見れば、「我々にとって政治的に適用可能な実用的智慧」(1:522、傍点引用者)を得ることができるのだとアーノルドは言う。同じく第3巻の初版序文で彼は歴史研究(特に古代史研究)の効用をこう総括する。「ギリシアやローマの歴史は、遠い時代や忘れられた制度についての無為な探究ではなく、現在あるものごとを生き生きと見せてくれるものであって、学者の好奇心の対象というよりはむしろ政治家や市民の教育にこそふさわしい教科なのだ」(3:xvi、傍点引用者)。コウルリッジの言葉を借用すれば、歴史は「政治家の手引き」(*the statesman's manual*)だということになる。アーノルドはこうしてニーブールの古代研究の方法論とヴィーコの体系的学問への志向を組み合わせて、教育の材としての歴史学の実用的価値を説明しようとした。「人生の教師」というフレーズこそ用いてはいないものの、彼はニーブールがこのフレーズに与えた19世紀的な意味を敷衍して説き示したと言えるだろう。

トマス・アーノルドの息子マシューは、1857年に行なったオクスフォード大学詩学教授就任講義で、父がヴィーコから学んだ循環史観を最大限に利用した。この講義で彼は、父トマスの忠実な息子にふさわしく、紀元前5世紀のギリシアが19世紀のイギリスと同じ文明の発展段階にあったという例の理論を援用し、古代研究の意義を説いた。ところが、興味深いのは、彼が父の理論を利用しながらその逆手をとって、いわば趣旨を裏返してしまったことである。歴史を「政治家の手引き」と見なしてもっぱら公共生活における政治的行動への指針を与えてくれる点にその効用を見出したトマスに対して、マシュー・アーノルドは5世紀アテナイの詩人たち(ピンダロス、アイスキュロス、ソポクレス、アリストパネス)が個人としての現代人の心理に与えてくれる精神安定効果を強調する(詳細については舟川一彦『十九世紀オクスフォード』2000年、231-34頁を見よ)。「〈救い〉が成就するのは、壮大な光景を眺めて『わかった!』と思えた場合に感ずる、調和の取れた満足感を手に入れた時——我々の好奇心を刺戟し続けながらいつまでも理解されることを拒否する巨大で流動的で混乱した光景を目の前にして我々が感ずる、堪えがたいもどかしさから脱することができた時——である」(Matthew Arnold, 'On the Modern Element in Literature', *Complete Prose Works*, ed. R. H. Super, Ann Arbor, 1960-77, 1:20)。この理解と満足感を現代人の心にもたらずのは歴史書ではなく詩だと彼は言うのだ。A. H. クラブに宛てた1852年10月28日の手紙の中でアーノルドは、歴史ではなく、こうした効果をもたらす古代の詩人たちの作品を「人生の教師」と呼んだ。「近代詩が存立するための要件は内容にあります。内容がなければ話にならない。近代詩は、古代の詩人たちの作品がそうであったように、十全な人生の教師(*magister vitae*)とならなければいけないのです。」

マシュー・アーノルドは歴史よりも文学を上位に置く点で、キケロやシドニーの路線に回帰したとも言える。だが、同時に、「人生」の展開する場を社会生活から個人の自我の内部に移し替えることによって、詩人アーノルドはかつての弁論家の理想の中にあつた社会との関わりを喪失し、人生

(vita)を構成する他の部分から切り離された自律的な「文学」(Poetry)の領域をつくり上げてしまった。これはアーノルドひとりの気質という理由によって説明されるべき現象なのだろうか？ それとも、ヴィクトリア朝という時代そのものの中にその要因が見出せるのだろうか？

もう一点、私には答の見つからない疑問を呈示してこの文章を終えることにしたい。アーノルドはなぜ、彼以前のすべての用例に反して、「教師」(=詩)を女性(magistra)ではなく男性(magister)として表記したのだろうか？ ラテン語 *poesis* もドイツ語 *Dichtung* も女性名詞なのに……。もしかすると、当時の英国では「女性教師」といえば即座にガヴァネスがイメージされ、彼が思い描く威厳ある人生の師としての詩人像にふさわしくないとされたのだろうかとも考えてみたが、確信もてない。ご教示いただける方があれば幸いである。



## Victorian とは？——イメージの多様性

新井 潤美



ヴィクトリア朝といえば、私が卒業したロンドンの学校はヴィクトリア朝に創立された。イギリスではそれは古いというよりも、むしろ新しい方であって、最も古いパブリック・スクールは創立が6世紀まで遡る。とは言ってもそれは男子校の場合であり、私の通っていた学校は教育施設として Royal Charter を与えられた最初の女子校である。ロンドンのハーリー・ストリート (Harley Street) にあるクイーンズ・コレッジという中高等学校(secondary school)で(日本ではオックスフォード大学やケンブリッジ大学のクイーンズ・コレッジと間違われることもあるが、まったく別である)、1848年にガヴァネスの教育施設として設立された。この学校の歴史を簡単に辿ると、1842年に「家庭教師保護会」(Governesses' Benevolent Institution)が設立され、1847年から定期的に講演会を開くようになった。これらの講演会はガヴァネスが対象だったが、それ以外の女性も参加を許されていて、かなりの人気を集めた。講演の会場は、保護会の幹事を務めていたデイヴィッド・ラング(David Laing, 1800-60)が、失業中の家庭教師を住ませるために、ロンドンのハーリー・ストリートに買った建物だった。そして1848年にはこの建物で正式な女子教育のための学校、クイーンズ・コレッジが設立されたのである。この学校はしたがって家庭教師の養成を目的としていたが、「十二歳以上の淑女」ならば入学を許可された。そしてこの学校から、二人の有名な学校の創立者が卒業した。フランシス・メアリー・バス (Frances Mary Buss, 1827-94) とドロシア・ビール (Dorothea Beale, 1831-1906) である。この二人については、次のような詩まで、匿名で書かれている。

Miss Buss and Miss Beale  
Cupid's darts do not feel.  
How different from us

## Miss Beale and Miss Buss

この二人の女性はヴィクトリア朝に定着した、イギリスの女子学校の恐るべき *headmistress* のイメージそのものだったようだ。バスは 1850 年にノース・ロンドン・コリージェイト・スクール (North London Collegiate School) を、ビールは 1853 年にチェルテナム・レイディーズ・コレッジ (Cheltenham Ladies' College) という寄宿学校を、ロンドンの北西の温泉町、チェルテナムに開いた (ちなみに私はこの寄宿学校にも少しの間いたことがある)。

クイーンズ・コレッジは私が通っていた 20 世紀後半には建物も増築し、もう少し近代的な設備も増設されていたが、たとえば教室の木の机は、表面が斜めになっていて、そこを上を開けると、本や筆記用部を中に収容できるようになっている。そして表面の奥には *inkwell* と呼ばれる、インクを入れる壺が埋め込まれており、ペンを置く溝のようなものもあった (これはチェルテナムの学校も同じだった。作りが頑丈な机なので、なかなか壊れないのである)。もちろん私が通っていた頃は、すでに羽ペンをインクに浸して書くという時代ではなかったが、それでもヴィクトリア朝の伝統を引きずっていて、ボールペンは禁止で (鉛筆はそもそも数学の図形を描くとき以外は使わない) ノートやテストの答案はすべて万年筆で書かなければならなかった。そのため、テストの時にはいつも問題用紙と答案用紙のほかに、ピンク色のインクの吸い取り紙 (*blotting paper*) が配られた。

クイーンズ・コレッジやチェルテナム・レイディーズ・コレッジが特に変わっていたわけではなく、このように、20 世紀後半にもかかわらず、イギリスではヴィクトリア朝の慣習がまだまだ色々なところに根強く残っていたのだが、それにもかかわらず、というか逆にそのせいなのか、ヴィクトリア朝に関する反動も強かった。ヴィクトリア朝の家具や建築は「ごてごてしている」、「趣味が悪い」と批判され、現在の大英図書館の最寄り駅セント・パンクラス駅の建物や、ケンジントンのアルバート記念碑も「趣味の悪いヴィクトリア朝建築」の例として批判された。また、ロンドンなどの町の郊外に広がるヴィクトリア朝のセミ・ディタッチドの住宅は景観を損ねる醜悪なものとして非難を浴びた。モダニズム建築家のル・コルビュジェが、無計画に広がるイギリスの郊外住宅地を ‘a kind of scum churning against the walls of the city’ と 1933 年の近代建築国際会議 (International Congress of Modern Architecture) で呼んだことも知られている。イギリスではモダニズム建築は決して愛されたわけではない。そして美的には悪名高い郊外の住宅地は、ロンドンなどの都市に通勤、通学ができる距離にあり、空気が綺麗で緑もある *rus in urbe* (「町における田園’) として、住むのには快適な場所でもあった。しかしそれでもヴィクトリア朝建築が好きだとか、心が和むなどということをお認めることがどこか恥ずべきことのように思われてしまうのである。「郊外」 (*the suburbs*) が、住みやすい快適な場所で、今ではその住宅は価格が高く、いわば「高級住宅地」であるにもかかわらず、*suburbs* にどこか「洗練されていない」、「保守的でせせこましい」というネガティブなイメージが付きまとうのも、ヴィクトリア朝で定着したイメージの影響が原因なのである。

音楽についても同様のことが言える。イギリスの学校では毎日の朝礼で賛美歌を歌うが、その多くは、ヴィクトリア朝の作曲家が作った、メロディ豊かなキャッチーなものである。中でも特に愛されてる賛美歌の一つ、‘Onward, Christian Soldiers’の作曲者で、サヴォイ・オペラ (Savoy Opera) でも知られるアーサー・サリヴァン (Arthur Sullivan, 1842 – 1900) の曲も人気があり、私の学校の友人たちは「オペラなんて難しくてわからないけれども、サヴォイ・オペラは別」とよく言ってい

たし、実際にイタリアのオペラ、パリやウィーンのおペレッタが扱う情事や不倫と無縁なサヴォイ・オペラは、イギリスの学校の学芸会で上演される定番だった。それでも例えば音楽の先生などはサリヴァンのことを「センチメタル」で「甘い」曲を書く、ヴィクトリア朝の遺物と片付けていた。それが「音楽通」の取るべき態度だったのである。

つまりヴィクトリア朝は20世紀の後半になってもイギリスの、特にミドル・クラスの文化と生活の中で重要な地位を占めていながらも、それが逆に、20世紀のイギリスにおいてはあまりにも時代が近いということで、いわば一種の近親憎悪、あるいは親に対する子供の反抗のように、ヴィクトリア朝はことさら揶揄や嘲笑の対象となってきたと言えるだろう。それはあくまでも愛情のこもった反動とも言えるかもしれないが、それでもなかなか強い反動ではあった。

しかしその後、さらなるリアクションが起こり、今度はヴィクトリア朝が再評価されるようになった。Victorianaと呼ばれるヴィクトリア朝の物品の価値は高まり、ヴィクトリア朝の住居、建築、音楽、絵画も見直されている。とはいえ、今でもVictorianという形容詞が、イギリスではあまりポジティブな意味で使われていないことも事実だろう。それだけヴィクトリア朝はまだイギリスにとって、完全に距離を持つてみることのできない存在なのである。一方でアメリカではVictorianという言葉は伝統や昔ながらの価値観を示す、褒め言葉として使われているようだ。言うまでもないことのようにだが、ある国の時代や文化にはなんらかのコンテキストやそれに伴う価値観やバイアスが伴うが、それを外から見る場合にはそのようなバイアスとは無関係なところで考察や分析を行うことができる。日本におけるヴィクトリア朝研究はその意味でも重要なものである。日本とイギリスの歴史的な交流や、日本から見たヴィクトリア朝の文学や文化の研究は興味深く、今後はさらに国際的な貢献が期待される分野ではないかと思うのである。



## 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2023 年度総会

日時：2023年11月18日（土）16時40分～17時

場所：関西大学千里山キャンパス、Zoom（司会 玉井史絵事務局長）

議題

### 【報告事項】

#### 1. 2023年度活動報告・活動予定

##### I. 運営委員会、役員会関係

###### 運営委員会・理事会

2023年7月11～18日 第1回 臨時理事会（メール審議）

2023年7月27～28日 第2回 臨時理事会（メール審議）

2023年10月31日 第1回 運営委員会（Zoom）

2023年11月16日 理事会（Zoom）

2024年3月 第2回 運営委員会（メール審議）

###### 大会企画・準備委員会

2023年8月3日 第1回 大会企画・準備委員会（Zoom）

2024年3月 第2回 大会企画・準備委員会 (Zoom)  
学会誌編集委員会

2023年1月 第1回 編集委員会 (メール審議)

2023年8月 第2回 編集委員会 (メール審議)

## II. 学会誌、ニューズレター

2023年5月 *The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 22 発行

2023年11月 『ヴィクトリア朝文化研究』 (*Studies in Victorian Culture*) 第21号発行

◎会員動向 対象期間：2022年4月から2023年3月まで

新規入会者 6名 退会者 17名

2023年3月31日現在 会員 311名 (うち学生 30名)

### 2. 学会誌について

上記の通り、発行された旨報告があった。

### 3. Newsletter について

上記の通り、発行された旨報告があった。

### 4. 学会企画事典の進捗状況について

大石和欣事典編集委員会副委員長より、事典の計画の進捗状況が報告された。

### 5. その他

『ヴィクトリア朝文化研究』の J-STAGE 登録が今後進められる旨、報告があった。

## 【審議事項】

### 1. 2022年度決算

資料に基づき報告され、了承された。

### 2. 2023年度予算案

資料に基づき報告され、了承された。

### 3. 次期役員について

資料に基づき報告され、了承された。

### 4. 「研究活動における不正行為防止等のガイドライン」について

『ヴィクトリア朝文化研究』の剽窃問題を受け、「研究活動における不正行為防止等のガイドライン」が審議され、了承された。



## 2022 年度決算報告書 (2022.4.1-2023.3.31)

単位：円

### 【収入の部】

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	6,209,545	
利子	10	ゆうちょ銀行（総合講座）より
出展料	0	
学会費	1,732,000	
学会誌販売	0	
合 計	7,941,555	

### 【支出の部】

項 目	金 額	備 考
通信費	51,106	振込票や学会誌送付に係る郵送費
大会経費	102,083	大会講演講師謝礼、ポスター代等
懇親会費	0	
サーバーレンタル代	9,721	更新料含む
学会誌作成・郵送費	700,466	大日本法令印刷株式会社へ依頼
学会誌用図書費	26,187	書評図書
振込手数料	1,358	振込、振替時に生じる手数料
消耗品費	473	コピー用紙、インク等
役員会費	0	会場費
役員交通費	0	
非会員謝礼・交通費	40,000	学会誌書評執筆者×4名
学生会員奨励金	10,000	大会発表学生会員×1名
事務局員謝礼	240,000	月 10,000 円×2名
合 計	1,181,394	
次年度繰越金	6,760,161	

以上の通りご報告いたします。

2023 年 8 月 22 日      会計 玉井 史絵

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2023 年 9 月 30 日      会計監査 並河 葉子



## 2023 年度予算案 (2023.4.1-2024.3.31)

単位：円

### 【収入の部】

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	6,760,161	
利子	10	
出展料	0	
学会費	1,732,000	
学会誌販売	0	
大会補助金	0	
合 計	8,492,171	



【支出の部】

項目	金額	備考
通信費	52,000	2022年度 51,106円
大会経費	150,000	2022年度 102,083円
懇親会費	40,000	
サーバーレンタル代	10,000	
学会誌作成・郵送費	750,000	2022年度 700,466円
学会誌用図書費	80,000	書評用図書 2022年度 26,187円
振込手数料	2,000	
消耗品費	5,000	文具等 2022年度 473円
役員会費	0	理事会、運営委員会、編集委員会
役員交通費	300,000	運営委員会、編集委員会
非会員謝礼、交通費	50,000	
学生会員奨励金	20,000	
事務局員謝礼	240,000	月 10,000円×2名
合計	1,699,000	

次年度繰越金	6,793,171	
--------	-----------	--

合計	8,492,171	
----	-----------	--

本予算案は対面での大会開催を想定したものです。



## 第24回大会のお知らせと研究発表の募集

第24回大会は、2024年11月23日（土）に上智大学で対面形式にて開催予定です。

「現代におけるヴィクトリアン・ヒーロー／ヒロイン像の変遷と消費」（仮題）というラウンドテーブルを予定しております。報告者は、諏訪暁氏（同志社大学）、熊谷めぐみ氏（立教大学大学院）、司会は宮丸裕二氏（中央大学）です。

特別講演は、永富友海氏（上智大学）にお願いすることになっております。ご講演タイトルは「中期ヴィクトリア朝小説を縦に読む——ハイド・パークを中心に」です。また、舟川一彦新会長からも、会長就任特別講演として、これまでのご研究について短くお話しいただく予定です。

第24回大会で研究発表（発表時間30分、質疑応答15分）を希望する会員は、発表要旨（400字）と略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）および主要業績を記したWORDファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。送信後3日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いします。

締め切りは2024年7月10日（水）必着です。

本学会は学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励する目的で、運営委員会と理事会の議を経て、「学生会員大会研究発表補助金規定」を制定いたしました。大会研究発表を行う当該年度に本学会の学生会員である者を対象に、10,000円を支給いたします。（ただし、この補助を受けた会員は大会後最低2年間、会員として在籍しなくてはなりません。）詳細は、事務局までお問合せください。

懇親会、その他大会の詳細につきましては、今後適宜学会メーリングリストにてご連絡をさしあげる予定です。

## 第 25 回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2025 年 11 月中旬～下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 25 回全国大会（開催場所と日時は 8 月以降に決定される予定です）における、シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ 2 時間 30 分程度（15 分の休憩を含む）の時間枠を予定しております。

締め切りは 2024 年 10 月末日（木）必着といたします。

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会（2025 年 1 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締め切り：2024 年 10 月末日（木）必着
2. 申請方法：下記の申請必要記載事項を記入した WORD ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。
3. 申請必要記載事項
  - ①シンポジウム／ラウンドテーブルのタイトル
  - ②趣旨（400 字程度）
  - ③企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
  - ④プログラム：1）司会者（氏名、所属）2）報告者（氏名、所属）3）各報告者の題目および報告要旨（200 字程度）4）タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度〔休憩含む〕に収まるように計画してください。）

\*シンポジウム、ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。

4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1

慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室（英語）石川大智研究室内

TEL：045-566-1133

E-mail：victorianstudiesjp@gmail.com

### 編集後記

第 23 号には、新会長の舟川一彦先生と新副会長の新井潤美先生が、ご多忙なか玉稿をお寄せくださいました。両先生と、ニューズレター作成にご協力いただいた諸先生方に、深謝申し上げます。本号から編集を担当します、何卒よろしくお願いたします。お気づきの点やご要望があれば、お知らせください。（NL 担当 若名咲香）

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局  
〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1  
慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室  
（英語）石川大智研究室内  
TEL：045-566-1133  
E-mail：victorianstudiesjp@gmail.com  
発行日：2024 年 6 月 1 日